星と邂逅する恐竜　【ジョジョ】

えみ(piplup)

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ディエゴ☆ブランドーはピッチ☆ピチの　２　０　歳！

賞金目当てで　レースに　参加したら！

ぽっくり☆死んでしまった！

そして、目を覚ますと　そこは　未来で（１９８０年代）～～～～～!??

いったい　ディエゴ　どうなっちゃうの～～～～～!!!?

３部→死んだと思ったらホリィさんに助けられて、ホリィさんのために旅に出るディエゴくんのわく☆わく大冒険です。←イマココ

４部→とべこんてにゅーど　そこまでたどり着けるのか？何年かかるか楽しみだね。

目次

始まりの3部 ―― 1
優しき星々 ―― 7
星々と恐竜 ―― 14
思い出す恐竜 ―― 18
目覚めた星

始まりの3部
優しき星々

１８９０年　アメリカ　で、
Ｓ（スティール・ボール・ラン）　Ｂ　Ｒという、アメリカで人類最大の大陸横断レースが開催された。
もちろん大国になりつつあるアメリカでの　大規模なレース
世界の注目を集めるこの大会に、

この俺、　ディエゴ・ブランドー　　は参加したが、、、
、
、
、（なんやかんやあって）
、
レースの後半、　俺は　鉄道と派手に接触したが、　その程度では
！

鉄道に轢かれた程度　　では、、
俺は、、　俺は！　　揺るがないと！

「勝ったのは俺の方…だ!!」

と　血反吐混じりに　言葉を　吐き出したのは　いいが、、
、
、、
、あぁ、目が、霞、、む。。

「……」
、、

…流石の　このＤｉｏも、上と下が　離れてしまっては

次に　目覚めることは、

もう、

無いのだろうな

、

、

、、

、

、

、、
?

時は　巡る。

１９８７年

ある家の前に、金髪の青年が倒れている。

青年に気付いたのだろう、中から家の女性が慌てて飛び出してき

た。
女性が青年に駆け寄ると、大声で家の中に助けを求めたようだ。
そんな、慌てた様子の女性を、
”やれやれだぜ”
と　呆れたように　助けたのは、
その女性の息子であった。

チュンチュン　と　鳥が鳴いているのが聴こえる。
とても、眠い。
？　眠い？
いや、とても長く寝ていた気もする。
…いや、　だが、
そもそも、おれは　プロのジャッキーとして、
健康には、　一日のサイクルには、しっかりと　気　を　使
っ　て　いたはずなのだが。
、、？
、
、
、
！

「…っは！」
ガバッと音を立てながら、状態を起こす。
いきなり動いたのだが、頭がくらくらと目眩がするだけだった。
頭を上げたからか、
急激に頭に血が回って、目が冴える
だが、そんなことは どうでもいい。
俺は、なぜおきている…??
確かに、自分は死んだはずだ。
もし、生きていたとしてどうやって治したんだ？スタンドか？ スタンド使いだとしてもあの状態の俺を助ける必要があるのか？ そして、ここは、どこなんだ？ 随分特徴的な造りをしているが――！

思考を断ち切ったのは、 スパンッ と襖が開き、そこに居たのは巨人であった…

「よぉ、目が覚めたか。」
「 」ビクゥ

思わぬ、姿の恩人（？）を目にし、言葉を失う。
日本語で話しかけられたが、ディエゴは英国人であった。

つまり、ディエゴには何を言われているのか分からなかったのである。

何を言われたのかわからないが、英語は世界に通じる。
圧倒的な巨躯にも動じず、会話を試みるのであった。
「Ah…（あー、）did（貴方が）you（僕を）help（助けてくれたのかな）me？
Thank（先ずは）you（礼を言うよ）.
And（そして）where（ここは）is（何処なのかな）this（）place（）？」
「！

……Do not understand Japanese?

Well…you were falling in front of

Do you remember?」

英語は、分かるようでそっと胸を下ろす。

しかし、Japan？　聞いたことがないな。

「Where is Japan located？

And

did I really fall in front of your house

？」

「You are bothering me.

What is your name？」

そうそう　たやすくには　教えてはくれないみたいだ。

さすがにがっつきすぎたかな……。

「Hmm, this was rude.

I, ll call it anew, I, m Diego Brando

A professional jockey.」

「Jotaro, Kujo.

So why did you fall in front of your

？」

……”ジョータロー・クージョー”　か、

……”ジョジョ”　？　まさかな…

あいつ　は　あの後どうなったのか…、まぁ　今となっては　どうでもいいことだ。

息を吸って　にわかに信じたくないが、自分の予想では、

「

I 僕は was アメリカの participating レースに in 参加して an American racer.
And そして I 私は died 死んだ there ここで.
There 間違いは is ない no 何 mistake 間違い.」
「Aa…ああ? What 何 are 言って you 打つ saying 言う?
Did 頭 you 打つ strike 打った your 頭の head 頭?」

「…
Yes, ああ、 then それなら it どれ would 良かった have 良かった been 良かった better 良かった.
I 俺は certainly 確かに passed 過ぎた away 死んだ at 死んだ that 死んだ time 時.
But ただ that それ's だけ it だ.」

そう言った、ディエゴの表情は　冗談だとは思えない　”スゴ味”
があった。

「……」グッ

承太郎は初めてだった。気圧されたのは。この男は、自分の発言に
”覚悟”を持っている。そう確信し、緊張が走る、
その時、

「Hello〜〜〜!」ホリーン!!

天使が現れた。

星々と恐竜

現れたのは、４５歳には到底見えない　空条　ホリィ　である。

「うふふ、元気そうね！　お腹はすいているかしら？　お粥を作ったの、どうぞ食べて♡」

??、、、このレディは　誰かな？　なんと言っているのかわからないが、朗らかな笑みを、、俺に向けているが、？

思わず、ディエゴは首を傾げる、、輝くブロンドの髪が　さらりと流れる姿は　まるで絵画だ。

「おい、アマ　こいつは英語しかわからねぇぜ　」

ううん、やはり言葉が違うと何を話されているかわからない。。

「まぁ！　そ　う　だっ　た　の　ね！
I am Jotaro, s mother.
Can you eat rice porridge ?」

英語で話されたことに、すこし反応するが、それよりも重大な、突然の衝撃情報に　思わず　目を見開いてしまう。　こんな若い女性がジョータローの母親!?　人は見かけによらないものだ…

食べれるか、お粥…と言われてみれば　空腹感が湧いてくる気がした。思えば、最後に食べたのは何時だっただろうか、、？

…ありがたく、善意に乗るか、

「　　Thank you.
I, m Diego Brando.」
「　う　ふ　ふ♪　　If you are good,
you can stay here as much as you want

♪」

そう　楽しそうに、紡がれたのは　願ったり叶ったりの言葉――――
もしかしたら先程の会話を聞いて　励ましてくれている　という考えがよぎる――――
だが、その表情からみるに、、　ｗｈａｔ(ファッ)!?もしや素で言ってるとでも!?
え？、、、え―？

どうしてそのかんがえになった？？

「　」ポカーン
「おいっ!勝手に何を言ってやがる!」

承太郎は　母、ホリィの行動に理解ができずに、堪らず　吼える。
家の前に倒れていた男を助けたと思ったら、好きなだけ居ていい??
何を考えている!そもそも、
何を馬鹿言ってるんだ!!　警戒心はないのか!
奇しくも、２人の考えは１つに揃っていた。

「大丈夫よ!　だって、２人とも　とっても仲良くなってるんだもの♡」

何をどうとったのか、天然は　予想を遥かに通り越す。
ディエゴは　衝撃からか、考えるのをやめた。貧民出身の英国人には　刺激が強すぎた（　）

「　」ポカーン
「おいっ!そんなんじゃねぇぜ!」
「そーかしら?　うふふ♪　まぁ～そういうことよ♡　ごゆっくり～

！」

そう言って、ホリィは　お粥を置いて　嵐のように　過ぎ去って
いった、、、
、
、
はわわっ！なんて言うことだ…！どうしてこの男が　産まれたの
かすらわからない…!!　よく　いままで　騙されずに　生きてきた
な???
でも、あの女性が許しても　きっとこの男ならは許さないだろ！
お前きっと　そういう男だろ！な？
お前も反対だろう、と目線をやると、、

「　　チッ
Yeah, that's what women are saying.
She doesn't listen to anything.
Do what you like.」

!!?　好きにしろ!!!?
なんて言った　この男!!!俺は　是　が　聞きたかった訳では無い
し!!!むしろ　否が　ほしかったな!!!?　それはそれで困るが!!
何を勘違いしたんだ…こいつは！　これは紛れもなく　あの母あ
りのこの息子と認めざるおえない!!!　チクショウ!!!

「
And if you, re here, remember Japanese
、

承太郎は　さらりと告げて、流れるように　退出したので、
ディエゴはひとり部屋に残されたのであった

は　ぁ　!!?　なんだあの言い草は！
この　Ｄｉｏ　に、この国の言語を覚えろだとォ…!!
・・・　ピキーン―☆
ヤケになったディエゴの脳内は　無理矢理意味を見出した！
はわわっ？　もしや、この世界で生きる為の試練なのでは、、?!
きっと　そうだ！（白目）
なんにせよ、試練は〝克服して必ず殺す〟
それだけだである！
ディエゴは　炎を目に宿し、日本語の修得を　決意した。
、
そうして、ディエゴは　空条家の一員　となったのだ。

ーあるディエゴの1日ー

完璧を目指す　ディエゴの朝は早い。
まず、朝早く起きて　朝食を作っている　ホリィさん　を手伝う。
助けてくれた　ホリィさん　には　しっかりと　敬意を表し、出来ることは何でも手伝いに行く。
承太郎が　学校に行く頃までに、洗濯なども　あらかじめやっておき、
ホリィさん　が、ゆっくりと　承太郎を見送れる状態をつくる。
「承太郎、行ってらっしゃい～♡」ンーマ♡
「……」
お昼は　ホリィさんと　共に作り、共に食べる。
なるべく日本語で会話をし、流暢に話す練習を兼ねている。

けっして絆された訳では無い

「すっかり　ディエゴくんの　記述上達してビックリだわ！　」　ホントニ！

「ホリィさんの　オカゲ　です。」ホンワカ

「うふふ♪」

ディエゴはホリィの為に　ありとあらゆる　家事を手伝ったことで、以前では考えられない程　家事技術が向上した

穏やかな朝食の時間だ。

午後からは　ディエゴが　ジョッキー　だと知った　ホリィさんが、知り合いの　馬牧場　を紹介してくれたので、馬の世話をしに行く。

馬との触れ合いは、ディエゴにとっての癒しの時間である。

愛馬であった、シルバー・バレット　程では　ないが、手入れをすることによって　その馬　本来の輝きを引き出すことが出来る。

また、馬と触れ合える喜びを噛み締め、

馬の癖を見抜くことに関しては、プロとして誇りを持ち　行う。

馬の世話でかいた　汗を流したあとで、夕飯の支度も手伝う。

そして、承太郎も　そろって夕飯の食卓を3人で囲みながら食べる。

「……」??〃??〃

「　キョウ　も　美味しいです。ホリィさん　」モグモグ

「うふふ♪　そうね！ディエゴくんが今日も手伝ってくれたからよ♪」ニコニコ

以上、ディエゴが　ここに住むことになってからの　1日のサイクル　となっている。

そろそろ、冬も本番になる。　そんな季節、
――その頃にもなれば、俺も日本語によく馴染んでいた――

唐突に舞い込んだ　報せには、
どうやら　ジョータローが　また暴力沙汰　を犯したらしく、
ジョータローは　日本　で　いう　不良ヤンキー？　で、喧嘩カチコミ？　喧嘩上等？　は　よくあるらしいが、今回は一味　違く、、。
なんと　ジョータローは　　留置場　から　出てこないのだ！
おかげで、ホリィさん　がとても心配している。
連日のように留置場へ　説得をしに　会いに　行っては、悲しそうに帰ってくる姿は　もう！見てられないモノがある！
ジョータローめ！とんだ不孝者だ！
そうなって　しまっては、俺、　Ｄｉｏ　の出番だな！
最悪恐竜化させればいいだろうし
承太郎のツンデレは　判りにくい為、好感度は低いのだ

「　ホリィさん、僕に説得を任せてくれないだろうか？　必ずジョータローを連れ戻してこよう！　」
「あら、ほんと？　仲のいいディエゴくんなら承太郎も出てきてくれると思うわ♪　承太郎のこと頼むわね！」
「　大舟に乗ったつもりで　このＤｉｏに　任せてくれ！」フフン！

胸を張り、胸に　ぽんっ　と手を当てる
ジョータローと　仲がいい　かは　知らないが、
ジョータローの説得ぐらい、
この　Ｄｉｏ　にかかれば赤子の手をひねるようなものだろうよ！

「うふふ♪　頼もしいわ！今日　実は、アメリカに居るお父さんも承

太郎のことを心配して日本に来てくれるらしいの！今からお迎えに行ってくるわ！」

……ん？　ホリィさんのお父様は俺が住んでいることを知っているのだろうか、？

このホリィさん　の性格だ、きっとでろでろに甘やかす親バカなのだろう…先のことを考えると胃が…痛くなるような気もするが、、

考えるのは置いておこう、まずはジョータローを出すことが優先だ。

ディエゴは承太郎の元へ向かった、、

思い出す恐竜

ジョータローを連れ戻しに来たは　いいが、何故か看守に泣き付かれたんだが??
まったく、一体どんなことを仕出かしたんだ？　ジョータローのやつ　…

――　ジョータローの前に着くと、とても留置所とは思えない光景が広がっていた…
思わず　ディエゴは言葉を失う

そこにあったのは　本来の留置所とはかけ離れた――留置所とは警察が、被疑者の逃走や証拠湮滅を防ぐために収容する警察署内の施設の事である（Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ　より引用　）為、物の持ち込みは認められていない――――　はずであったが……
これでもかと　ラジオや　酒・本　などが敷き詰められておりとても留置所の牢屋とは思えない室内になっている
留置所　とは　、、、？
思わず、ディエゴは悟りを開きかけるが
ホリィの為にもこうしては居られないと　気を強く持った…

「ん〝ん！　やぁ、ジョータロー。ご機嫌いかがかな？　」
「ディエゴか、てめぇ何しにきやがった　」

そう言いながら、言いたいことを確信した　表情（カオ）をする承太郎に
ディオ科特有の雰囲気を漂わせながらわざとらしく語りかける

「　言わなくとも　１つに決まっているだろう！
ジョータロー、お前を家に連れ戻しに来た　」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

「・・・・・・・・・」チッ

眉間に皺を濃くし　舌打ち一つ寄越す、そんな頑なな態度を見ていると

家を出る時に、ホリィさんに言われたことを思い出す

「そうです、ジョータローが出てこない理由はなんでしょうか？」

「理由？そうね、”悪霊に憑かれた”　って言っていたわ　」

ディエゴは　勉強し、会話くらいは出来るが、日常会話　程度の語彙までしか知らなかったので

・・・？　アクリョー　とは？

うーん、ストーカーのようなモノか？

悪霊　という言葉を知らなかった

わかりやすく疑問符を顔に浮かべたディエゴをみて、ホリィは　微笑みながら言った

「ディエゴくん、悪霊　っていうのは　Ｅｖｉｌ　ｓｐｉｒｉｔのことよ！　」

「なるほど！　…？　だが　ジョータローは霊を信じる人物ではなかったような？　」

化学が発展した現代（1980年代）に　幽霊　を信じる人は、稀である

なぜなら　ディエゴの（1890年代）時代ですら信じている人は　物好き　と言われるほどだったからだ。

話題が話題故に面を食らった顔をしたホリィだが

「そうね、確かに　そうかもしれないわ。でも、承太郎は　嘘をつかない優しい子よ　」

目を合わせながら　放たれた言葉は　まさに　暖かい母の愛　であり、ディエゴは　己の母(嫌がらせで)穴の空いた器に入った熱々のシチュー　(つまりまともに食べれないもの)を　ディエゴのために自らの両手を差し出す優しい聖母のような人物　が思い浮かび、ホリィのことを眩しく思った

ディエゴの反応に少し照れたようで恥ずかしそうにしながらホリィは言う

「だから、何かそうなった原因があると思うの　」

「…ええ、ホリィさんが言うんです。信じますよ　」

ディエゴがキザっぽく言うと、ホリィは思わず　顔を緩ませ　2人は笑いあった…

このような会話があったのだ

”悪霊”と言って　あのジョータローが　ホリィさんを離して閉じ篭もる程の　”理由”……

心当たり(スタンド)があると言えばあるが、まさかなぁ?…ないよな?

「…ディエゴ、悪いが、それは出来ねぇぜ　」

「それは…悪霊が憑いているからか?　」

「　……　」ピクッ

反応があったな。図星　なんだろうな

「…悪霊が怖いか?　」

「　……　」

「…黙りか？　悪霊ってのはどんなモノなんだ？　」

その時！流石に　喧しいのか、ついに　承太郎が動いた！

〝悪霊〟を見せしめるつもりなのだ！

「…チッ！どうなっても知らないぜ　」

ジョータローの纏う雰囲気が変わった！

〝悪霊〟がクる…！

「　なに、をッ！　」

承太郎の背後から、瞬く間に青色の逞しい腕が現れ、ディエゴに振りかぶられる！

ディエゴはその素早い動きを避けきれず、掠った頬を切られてしまう！

その代償に　〝悪霊〟の正体に気づいたのだ

「こッコレはッ！　はは、悪霊とは上手く言ったつもりか?!　ジョータロー！お前は〝スタンド使い〟なのだ！」

あまりにも身近にあった原因で思わずディエゴは顔を歪ませたのだった…

目覚めた星

苦々しく顔を歪ませながら、言い切ったディエゴを見て、驚いたのは承太郎だ。

「なにッ！ディエゴ、おまえは”悪霊”の正体を知っているのか!?」

「あぁ、よく知っているとも！それは”スタンド”と呼ばれるものだ。」

「ッ！」

明確な答えを出された承太郎は目を白黒させるばかりである。無理もない、”スタンド”という日常では有り得なかった現象に名前が付いていたのだから。

そんな承太郎とは対照的にディエゴはとても浮かれていた。

驚きで口が閉まっていないマヌケ顔のジョータローは、初めてだ！そもそもジョータローが顔色を変えることが珍しいのはこの数ヶ月でよく分かっていた。だからこそ、その変わらない仏頂面を変えさせることがこのＤｉｏの最近の楽しみと言っても過言では…！……いや過言だな。

久しぶりの優越感にその白い頬を上気させる。

その気分のまま、全てを説明しようかと思った。……が、はたと気づく。

そもそもスタンドとは一般的なものでは無い。そしてスタンドはそれぞれ強力であるし、それを制御するスタンド使いたちは攻略法にもなりえるスタンド能力の情報の口外はしていなかった。

何故なら教える事は即ち自分の死と成りえたからだ。いくらそんなに人が居ない留置所とは言えど人目が着く所で話す内容じゃない。

そういえば、ジョータローを家に連れ帰ることが目的であった。これは丁度いい。ジョータローは扱いきれてないスタンドの情報が欲しいはずだ。

「だが、スタンドの情報は命にも等しいからなぁ…此処(留置所)で話す事じゃあないな。……なぁ、ジョータロー。家に帰らないか？」

「…ッ！　チッ！」

わざとらしく話したことで額に筋ができていたが問題の解決法が重要なのがわかるらしく、数十分悩みに悩んだジョータローは、ついに牢屋から出た。

＊＊＊＊

家に帰った途端に席もつかないで道中の静けさが嘘のように承太郎は話を切り出し始めた。

「おい、さっさと知っていることを全て話せ。まず、”スタンド”っていうのはなんだ。」

「やれやれ、流石にせっかちが過ぎないか？久しぶりなんだ、立ち話も難だろう。」

そういうディエゴの後ろ姿はこの家に生まれたかのように馴染んでいて、もう随分ここにいることが感じた。勝手知ったる我が家の如くするすると進んでいることに苛立ちを感じるが、それ以上に俺に対して兄のように接してくるのが何よりも鬱陶しいので、前を歩くディエゴの頭を軽く叩いておいた。

”イッタ！おい、ジョータロー！なんの真似だ！”とか騒いでいたが、知らぬ振りをしておいた。

なんて事をやっていれば、居間に着いた。そこで座ればやっとディエゴはその口を開くのだった。

「まず、『スタンドとは何か』だったか？それは立ち向かう者、ｓｔａ

ｎｄ　ｕｐ　ｔｏ　という所から”スタンド”そう呼ばれている。
掻い摘んで上げると、
・スタンドの姿はそのスタンド使いにしか見ることが出来ない。
・スタンドが傷つくとそのスタンド使いも傷つく。
・スタンドにはそれぞれ能力を持っている。
そんな所だ。どんなスタンドなのか、それを知ることが重要になってくる。」

一息置いて、ディエゴは続ける。

「ジョータロー、スタンドは必ずしも利点になる訳では無い。襲われる事もあるだろうし、お前のスタンドはまだ不安定だ。その持った性能を知るためにも練習した方がいいぞ。」

発現したての時に制御しきれずに、思わないところで大怪我させてしまった承太郎には耳が痛い話だった。
２人とも口を閉じて、静けさが広がった故に、玄関から聞こえてくる恐らく母と祖父であろう騒がしい声が聞こえてきた。面倒な予感がしたが、避けられないと、気を引き締めて、２人は出迎えに行くのであった。